

じょうどまんだらえず
浄土曼荼羅絵図

種 別	小松市指定文化財 絵画
指定年月日	昭和42年11月3日
所 在 地	東町（法界寺）

浄土曼荼羅とは、浄土の様子を絵画的に描いたもので、日本では阿弥陀如来の西方極樂浄土の様子を描いたものが一般的である。曼荼羅と称するが、密教の曼荼羅のように円形等の定式に従って仏を配置したものではなく、^{じょうどへんそうず}浄土变相図ともいう。

法界寺の曼荼羅は、奈良県^{たいまでら}当麻寺の通称「^{たいまんだら}当麻曼荼羅」をもとに描かれたもので、『^{かんむりようじゅきょう}観無量寿経』に基づいて阿弥陀浄土のありさまを表している。縦365センチメートル、横238センチメートルで、絹地に金と極彩色で描かれている。製作時期は江戸時代初期である。

観無量寿経の内容を図案化しており、内陣・外陣に分けられる。外陣の、向って左側には、^{あじゃせ}阿闍世という太子が父王を幽閉・餓死させようとする観無量寿経の序文の部分が描かれる。右側には、阿闍世の行いを悲しむ母の^{いだいけ}韋提希夫人の願いによって釈迦が説いた十三観の定義を、下段は、九品の往生観が描かれている。

中央の内陣には、阿弥陀浄土図が描かれる。中央には阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩の三尊を中心とした聖衆が配され、極樂浄土の様子が表されている。



※文化2年(1805)の裏書によると、筆者狩野守信（探幽）とされる。